

第43回滋賀県立近代美術館協議会概要

1 開催日時：平成29年(2017年)3月29日(水)午前10時00分から正午まで

2 開催場所：滋賀県立近代美術館 会議室

3 出席者：協議会委員

上野、安達、大澤、神田、佐渡、澤野、千速、前川、柳原(会長)、十倉、松本、吉野の各委員(敬称略、出席12名)

事務局

桂田館長、相井副館長、馬淵新生美術館整備室長、他3名

4 会議次第

(1) 滋賀県立近代美術館 桂田館長 あいさつ

(2) 報告事項

収蔵品収集審査部会の審査結果について

(3) 議 事

①平成28年度事業実績について

②平成29年度事業計画について

③新生美術館の整備状況について

④その他

5 会議概要

(2) 報告事項

収蔵品収集審査部会の審査結果について

(部会長より説明)

第5回収蔵品収集審査部会(平成29年2月14日開催)の審査結果についての報告
購入作品1件、寄贈の申入れがあった日本画・郷土美術9件9点、現代美術2件11点、
県有美術品管理換10件10点について審査をおこなったところ、いずれも美術館の収集
方針に添うものであり、収集は適切であると判断した。

(3) 議 事

① 平成28年度事業実績について

事務局から配布資料により平成 28 年度の美術品収集事業、展覧会開催事業、教育・情報普及事業および管理運営事業実績について説明を行う。

② 平成29年度事業計画について

事務局より配布資料により平成 29 年度の美術品収集事業、展覧会開催事業、みんなで創る美術館プロジェクト事業および美術館広報・マーケティング事業計画について説明を行う。

【主な意見等】

(委員)

休館中の美術館の方向、方針を示してもらいたい。具体的な事業を落とし込んだ資料はあるのか。

(事務局)

(リニューアルオープン) スタートは決まっているので、それに向けて美術館と新生美術館準備室のスタッフが力を合わせて進めている段階である。

(委員)

今年は成安造形大学で県内出張展示をやるが、次の年はまた別の美術館や博物館でやることになる。3年間通して行う事業の固有名称を決める予定はないのか。

(委員)

県展はあるのか。

(事務局)

県展は県立文化産業交流会館で8月ぐらいに予定している。美術館の学芸員も委員の一人になると思うので協力してやっていきたい。

(委員)

子どもたちを美術館に連れてくるのは遠いと難しいし、学校連携事業プロジェクトは学校側としては大変ありがたい。ぜひ推進してもらいたい。

平成32年度末までに県内合わせて小中学校320校を目指すのは具体的に広報をしないと難しいのではないかな。

たとえば各市町の校長会へ説明に来ていただくなど、単にパンフレットを配るだけではない広報の仕方を検討頂きたい。

学校現場、教育の代表として協力できることはしていきたい。

私自身も子どもがいるけれど、美術館の情報を得る機会が少なかった、休館となるとこれからますます少なくなると思うが、休館中の3年間で積極的にやっていく広報は何かあるのか

(事務局)

従来のホームページやインターネットは当然使っていくが、今後、一番何が効果のあるもので訴えやすいのかを含めて検討する。新生美術館オープンの際には、広報・マーケティング戦略を確実なものにしていきたい。

(委員)

昨年度までサポーターをしていた。アウトリーチ事業のときはサポーターが協力できる場面も多いと思うが、大津市内であれば動きやすいけれど、彦根など遠くなると時間的にも金銭的にもつらいと感じた。

学芸員が増えるなどしてまかなえれば問題ないと思うが、サポーターの協力が必要であれば、(サポーターに対する)サポートを具体的に考えてもらえるとありがたい。

サポーターは学芸員の講義を受け、いろいろと教えてもらったうえで解説のボランティアにのぞんでおり、間違いには気を付けてはいるが、不適切なことがないかの判断等ができる責任者として、そばに学芸員がいてくれると、とても助かる。

(事務局)

ボランティア保険は今年度の4月から加入できるようになっている。また、交通費に関しては、県内の場合は実費を支給する予定である。

新生美術館オープンの際には、サポーター制度の個々の部分についても見直し、学芸員の体制も含め改善策を施すよう考えている。

(委員)

平成29年度の事業展開の規模からして、スタッフが大変少ないと思う。この人数の中でこれだけの事業展開というのは大変。

(事務局)

参考までに申し上げますと、学芸員は現在で9名。事務は5名。休館中は事務の人数が減らされる。整備室にもスタッフはいるので一体になって早々にプロモーションを打っていこうと考えている。

(委員)

今は子育て応援団をしているが、地域で活動する子育て応援団体は県内各地でたくさんあり、とても元気がある。地域の親子に対して集客力もある。それを活用してはどうか、もしくは団体と共同連携するというのはどうか。

(委員)

県内はもちろん、近隣の県などできるだけ広い範囲で広報に重点を置いてもらえればと思う。何か協力できることがあればしたい。

③ 新生美術館の整備状況について

事務局から配布資料により新生美術館の整備状況の説明を行う。

【主な意見等】

(委員)

予算の関係で設計を4割ほどカットされた部分があると聞いているがどこか。

資料を見る限りは図書館との連携ということでラーニング広場内の勉強するところがなくなっているのか。新築のもので、いくつかなくなっているところがある。

(事務局)

新館部分の増築面積を減らした。面積は減ったが展示もしっかりできるような機能になっている。図書館のほうはSANAAの提案で図書館の池側のほうから直接図書館のほうにつなぐ道があって入り口もそこから設けようかという話もあったが、管理上の問題と友の会などからの意見もあり改良を図った。

回遊式公園のコンセプトの元、図書館に来られる方は隣に美術館があるということをあまり認識されていない。

図書館の前や隣で「何か楽しいことをやっているな」というようなコミッションワークをやって図書館との連携を図ったらどうかという意見もあった。そういうことを踏まえながら設計をまとめているところである。

(委員)

富山に美術館が新しく建てられたが、入札が2回不調になった。京都市の美術館もネーミングをとある大手企業に売って予算にあてたことに賛否両論あった。近年の建築工事は人件費も材料費も高騰しているが何とか頑張っていたきたい。

(委員)

県民に広く周知して、足を運んでもらう手だてとして、ギャラリーを運用したらと思う。滋賀県書道協会で開催をしているが、書道は人が集まる。青少年書展は3日間で9千人を超え、書き初め展は50年以上やっているが3日間で4千人を超える。そういうものをうまく使ってもらいたい。

一番人が集まらない2月に企画展示室の一部をフレキシブルに使うというように、運用面

で検討頂ければと思う。既存の草の根の展覧会をうまく取り入れていただければいいと思う。

次世代の子供たちが興味をもって足を運ぶように、オープンの暁には県内の小中学生に招待券を配ってもらいたい。美術館というものを体験させるのはすごく大事なことだと思う。

また、長期的な視点で美術館へのアクセスの改善を龍谷や立命館を巻き込んで提案し続けてほしい。

たった9人の学芸員なので申し上げにくいですが、世界中から集客するというコンセプトもあったように、県外、国外の人に発信できる体制をこの3年間でつくれたらいいのではないかと思う。

(委員)

毎年、近美のギャラリーを使用しているが、一回につき千枚ほどダイレクトメールで案内を出している。その中に美術館の常設展などをタイアップして、横のつながりをしっかりしていけばよいのではないか。

美術館がここにあるということが、外から見てははっきりとわかるものを新生美術館に設置できないかと思う。

(委員)

企画展示室とは貸し画廊の意味なのか、あるいは著名な作家の作品を集めて折々にやるような意味のみの展示室なのか、もしくはどちらも兼ねているのか。

(事務局)

基本的に企画展示室は年間の展示プログラムを決めて、それを展示する場所であるが、以前から展覧会のない期間に展示室を開放できないかという意見は頂いているので、今後美術館全体の運用方針を考えていくなかで検討していきたい。

公園全体の中での案内表示は改善していきたい。

JR瀬田駅で降りて来館される際には、道沿いに目につくような看板等の設置を検討している。

(委員)

予算が厳しくなっていくなかで、既存部分で特にギャラリーの照明や壁、彫塑台などの改修がどれだけできるかが少し心配だ。

回遊式であるため、年配の方がどれだけ楽に動けるようになるか気になる。企画やソフトの面はもちろん大事だが、ハード面でも、わくわくしながら回遊して目的のところへ行けるようになるように考えていただきたい。

オープンまでの間にどれだけ県民に情報が行き渡って盛り上げることができるのか、何か協力できることがあればやりたい。

(委員)

休館という扱いではなく、美術館は活動しているのだということを示して行ってほしいと思う。

具体的には施設がなくてもできるメディアアートや、インターネットサイトの中でバーチャル美術館をつくってそこに展示をしてもらおうとか、公募をしてそれを買いあげたりするのはできないだろうか。

そういうことをすることで、新しいことが始まるのだというのが具体的にわかってもらえると思う。行政のほうではなく外からの知恵や交流に刺激を受けてやって行ってほしい。作

家のほうからも期待が高まる良い機会になるのではないか。

(委員)

今使える場所で、地域のなかで何かできることをこの3年間で企画するのはどうか。

企画者、オーガナイザーごと公募したりしてはどうか。

そういう機会をたくさん持つと、もっとみんなに親しんでもらえるのでは。

(委員)

美術館と地域の関係を見直すリサーチプロジェクトをやりたいという若い作家がいる。地域の人と語り合ったり、一緒に作業したりするなかで答えを導き出そうとする。五感を使った調査活動だと思う。数字をきちんと集める調査もあるが、感性による調査という意味ではアーティストがリサーチャーとして地域に入っていくというのは重要だと思う。